



随筆

静かさを求めて

濱口浩三*

私は音楽、とくにクラシックが好きである。しかし、どこのオーケストラでないといけなとか、ピアニストは誰とか、レコードはどこがいいとかいうような趣味は全くないし、わかりもしない。ただ、気に入った曲を聴くだけの趣味である。大分前に、クラシックと短歌や俳句がよく似合うことに気付いた。たとえば、人が生まれてから死ぬまでを音楽にしたといわれるマーラーの四番を聴きながら、斎藤茂吉の歌などをよむと、マーラーにも茂吉にもより一層の深い感動をおぼえるのである。私はこの西洋と日本の文化の不思議な相互作用を愛して休日の夜をすごすことも少くない。このとき、少量の美酒があれば更に効果的であることはもちろんである。

* * *

しかし、音を楽しむ音楽以外には、この世には何と不愉快な音が多いことであろう。朝夕の電車の駅や車内に流されるアナウンスなどが先ずそれである。「乗車目標に向って三列に並んで……」といったたぐいのアナウンスは、われわれ戦争中に育ったものにとっては、何かを思いださせる不愉快で無神経な言葉である。私は煙草を吸わないが、「他のお客様の迷惑になりますから」に始まる禁煙のアナウンスもやかましい。駅のスピーカーで昔の修身のようなことを放送しているのは考えてみればおもしろいが、これは日本人の公衆道徳の向上に少しは役立ってきたのかも知れない。

しかし、煙草よりもっと不愉快で耐えがたいのは耳につけたカセットテープからもれてくる音である。あれは魂も肉体も血も失った骸骨の音としか思われぬ。満員電車のなかで煙草を

吸うものは先ずいないが、ウォークマンをガンガンならしている者にしばしば出くわす。満員電車のなかでは、あのガイコツの音からは逃れようがないのである。私はこれをきかされると全く思考力をなくしてしまう。昔から三上といつて、馬の上、枕の上、厠の上が考えるのにもっとも適した場所とされてきた。馬の上は現在では電車や車のなかであろう。私は1時間以上の電車の生活を毎日送っていて、読書や考える場所として愛好しているのであるが、これが全く駄目になってしまう。あるとき、隣に坐った若者のウォークマンからもれてくるガイコツの歌にたえがたく注意したら、謝って音を小さくしてくれた。これに勇気づけられて、またある日、隣の男に注意したら今度は席をけたててどこかにいってしまった。どうせ駅のアナウンスがうるさいのなら、禁煙と同じく禁音の注意もしてほしいものだ。「目にマンガ、耳にカセット、口ラーメン」というのが現代若者のひとつの姿だとおもう。あいているのは鼻だけであるが、それまで何かでつめたら死んでしまうだろう。

「目はいつでも閉じることができるが、耳がそのようにできていないのは何故だろうか」という意味のことをいったのは寺田寅彦であったとおもう。

* * *

谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」では、ともしびのない昔の夜がいかに暗かったかを想像し、顔もわからぬまま男女が恋にふけたであろう王朝の昔の夜を想像した。

衣装哲学で有名なスコットランドの哲学者カーライルは町の騒音をきらって塔にのぼって思索にふけろうとした。しかし、町の騒音はすべて逆に塔の上に集まって、この計画は断念せざるをえなくなり再び地上におりたという。カー

*濱口浩三 (Kozo HAMAGUCHI), 大阪大学理学部, 生物学科, 教授, 理学博士, 蛋白質化学

ライルの生きた1800年前後でさえそうであったのに、現在、都会で音のない世界を想像するのはむづかしい。時たま大学で停電にあうと、研究室のおそろしいまでの静かさにおどろくのである。

* * *

先年、イスラエルのワイズマン研究所のS教授が夫妻で来日した。東京の地下鉄にはじめて乗ったあと、車内が実に静かで隣の者同志が話をしていないのにおどろいたと話した。イスラエルのような小さな国では、外にでかけると大抵知り合いの誰かに出会って話がはずむということであった。

その翌々年、ワイズマン研究所を訪れたとき、テル・アビブに住んでいるS教授の家に数日とめて頂いた。テル・アビブからワイズマン研究所までの道の真中では、荷車をひく馬が興奮して大きく嘶くのをみた。ここは魚がうまいからといって、ある晩、魚料理のレストランにつれていってくれた。メニューのなかにBURIとかいてある。びっくりしたが、これはうまい魚だからとすすめられて注文した。でてきた魚は日本の鰯とは似ても似つかず、細長い魚が油にドブンとつかってでてきたような料理であったが、それは日本のボラであった。BURIとBORAという類似にまたびっくりしたが、何よりもそのレストランの騒がしくにぎやかなことは日本そっくりだとおもった。となりのテーブルには十四、五人の大家族が陣どっていた。イスラエルに帰国したばかりの長男の歓迎会が開かれて年老いた白髪の父親が歓迎の辞をヘブライ語で述べているところだとS教授が説明してくれた。

かえりにジャファの町を案内してくれて、芸術家ばかりが集まり住むという薄暗い建物のなかの絵画や織物を見てあるいた。夢のような幻想的な夜であった。たしかに知合が多らしくS教授はしばしば立ちどまって「シャローム」と挨拶し、短かい会話を大きな声でかわした。

「星涼しユダヤかたぎのはなし好き」これは久保田万太郎の句であるが、イスラエルに来て始めてこの句のうまさがわかった。日本のように華やかなどぎついまでのネオンはないから、星は涼しく澄んで美しくまたいたたいたのである。

イスラエルからのかえりはベン・グリオン空港からパリのド・ゴール空港までエル・アール航空の飛行機にのった。離陸まで機内にはポール・サイモンの「コンドルはとんでいく」だけがくりかえし流れていて淋しかった。女兵士のような暗褐色の服を着たスチュワーデスがニコリともせず歩きまわっていた。

* * *

十何年前にイギリスのオックスホードに3ヵ月滞在したことがある。ロンドンにでかけて2階建てのバスに乗りたくて乗ってみたが、次がどこの停留所なのか全く何のアナウンスもない。無愛想な男の車掌が切符をきっているだけであった。オックスホード行きの汽車のでているパディントンの駅がどこなのかきこうとおもったが、車掌は2階に上ったきり下りてこない。仕方がないから隣にすわっていた婦人にたづねた。彼女は自分もよく知らないがといいながら、じっと外を眺めていて、突然、次の停留所でおきなさいと教えてくれた。こうして無事パディントンの駅にたどりつくことができた。パディントンからの汽車のなかでも次の駅のアナウンスは全くなく、やはり窓から外を眺めていて、オックスホードらしくなると、見当をつけておりたものである。休日によくでかけたロンドンへの車中でも、ロンドンに着く直前に、車掌が「Hand your ticket, please」といいながら何もせず足速に通り返していったことが一度だけあった。日本でうるさいまでにくり返される次の駅の名の連呼とは全く対照的である。汽車のなかはまことに静かである。子供づれの乗客はほんとうにひそひそと話をしているだけで、子供も日本の子供とちがって実によくしつけられている。しつけられているといえ、犬も大へんおとなしい。オックスホードに行くたびにとめてもらうP教授の家には二匹の犬がいるが夕食後はP教授と夫人とわれわれ夫婦の間にはさまって静かにソファでねているだけである。それにくらべて、イスラエルのS教授のところの犬は日本の犬のように吠えてとびかかった。ある日の夕方、S教授はわれわれ2人をつれて近所に散歩にでかけた。日本の新興住宅街のようところで、どの家にも板塀があつて門札が

かかっていた。家々に飼われている犬たちは一斉にとびだしてきて塀のところでわれわれに吠えた。そのとき20人あまりのガールスカウトの団に出あった。そのなかに東京で育ったという少女が一人いた。日本語を知っているらしかったが、はずかしがって何もいわなかった。別れるとき始めてはにかんで「さようなら」といって手をふった。

ロンドン大学のG教授はオックスフォード大学の出身であるが、自分にはオックスフォードの静かさはたえられない、ロンドンがいいといっていた。その静かなオックスフォードも、夕方になると突然にあちこちの寺院や教会の鐘が何の調和もなくけたたましくなりだす。なかなか暮れないイギリスの夏の夕べの空はくもって、時折冷たい霧が濃く流れた。そんななかをなりわたる鐘の音は不調和ながらいろいろの感慨をおこさせた。

南にいくほど人はさわがしくなるという話をきいたことがある。そういえば、「北にかえる人の群はみんな無口で……」という歌謡曲があった。

* * *

外国の学会の会場には声によるアナウンスはほとんどない。小さなタイプされた紙を壁にはって知らせるだけである。日本で開かれる国際学会では、よく「……様」というでだしで、大きな声の呼びだしがある。この「サマ」という言葉は向うの人には大へん気になるらしく、しばしば「サマ」とは何かという質問をうける。「サマ」以外に「サン、チャン、チャマ、クン」とあると説明すると、みなびっくりする。

* * *

こうしてみると、ほどほどの静かさとはむつかしいものだ。しかし、学問の世界だけは静かでありたい。

残念ながら、日本では学界も決して静かではない。研究費申請のためのあの騒々しさは何なのだろう。日本語とも外国語ともつかぬテーマを並べたて、テレビのコマーシャルなみに新奇をてらい、自分の宣伝にこれつとめる。宣伝を始めたレストランは、その日から味がおちるといわれる。

文化を支えるものは流行でもなければ大きな声でもない。静かさと落ち着きであることを忘れないことだ。